

震災から8年 力を合わせて 生きがいのある地域づくり

宮城県石巻市 かどのわき町内会

NPO法人放課後こどもクラブ Bremen 理事長 寶 鈴子

門脇まちづくりの軌跡

現在日本各地で青池憲司監督の撮影した石巻市門脇地区のドキュメンタリー映画が感動を呼び起こしている。「まだ見ぬまちへ」と題されたこの映画は東日本大震災より6年半に亘る門脇地区の復興の軌跡を描いたものである。この映画に一番思いが深いのは当の石巻市門脇の地区住民であろう。東日本大震災直後のあの時は、この地区の誰にとってもこのような街ができると思像することは難しかった。

「石巻市門脇は全滅した」というのが石巻市民の意識であった。地域にある小学校

は焼けただれ、石巻市立病院は海のただ中にあった。銀行もスーパーマーケットもそこにあったことが嘘のようであった。

しかし、石巻市南浜、門脇地区に1700戸あった家が全てなくなったわけではなかった。瓦礫が打ち寄せられた日和山の麓に生き残った住民と数軒の家がそこにあった。残された住民は、震災翌日、山頂の避難所から日和山神社参道の石段を恐る恐る下りてきた。かろうじて難を逃れたテニスコート事務室で風をしのいだ。日除けの鉄製枠にビニールを掛け瓦礫の木材で暖を取り、身を寄せ合った。目の前に広がるのは懐かしい家々の残骸。なくなった日常のかけらが見つかからないかとさまよい歩いた。

日和山中腹にある「井戸っこ清水」が住民の命を支えた。

18日からはまた雪が降った。家族や親族の安否を確認するために数多くの方々がそこを訪れた。冷たい風が吹きすさぶ中で今日一日を何とか生き延びることしかできなかった。

そこに道を作ったのは自衛隊員だった。一歩歩けばそこには誰かが埋まっている中を、丁寧に探りながら道を造ってくれた。3月26日にはやっと山裾に残った家までの一本の道ができあがった。

道は、ボランティアを連れてきた。被災者への思いに突き動かされたボランティアは、生きる気力を運んできてくれた。





いきいき体操（門脇復興住宅集会所にて）



日和山階段掃除



餅つき



夏祭り

石巻市庁舎は機能を停止していた。門脇地区に生存している住民がいることを伝える手段はなかった。そこで「門脇で私たちが生きていく」と伝えるために、地区住民の一人、本間英一氏は瓦礫の中に流れ着いた子どもたちの鯉のぼりを道の入り口に掲げた。鯉のぼりは、精一杯の生存の証であった。

住民が身を寄せたテニスコートは、本間家が運営していた。古くは町長も務めた家柄である本間家には、自然に住民が集まった。「コミュニティを再生しよう」という意思を持てたのは、本間家の存在があったからと住民たちは語る。本間家がこの地に居を構えたのは250年前。常に地域の決

「コミュニティ再生の芽生え」

め事を中心の一人であった。歴史の持つ力は大きい。現当主も門脇の歴史に詳しく、石巻の海運史を伝えることのできる伝承者の一人である。当主の人柄もさることながら歴史の持つ重みが安心と信頼をもたらした。

震災後「門脇地区には国内外からたくさんボランティアが訪れた。その中のJENという団体が2013年に8坪のプレハブを寄贈してくれた。振り返ればこのプレハブが復興への第一歩であった。そのプレハブには住民が集える街にという願いから

「新住民との融合の陰に」

「まねきの家」という名前が付けられた。9月には門脇中学校の美術部の生徒たち11名がプレハブに花々の絵を描き住民の気持ちを明るくした。石巻高校の書道部の生徒たちは被災住民の詠んだ短歌をプレハブの壁に書き記した。「ふたたびの命与えよこの街に 港とともに栄えし街に」若いエネルギーが小さな希望を運んできた。応援に来たボランティア同士の結婚式は家族や友を失った悲しみを癒してくれた。

それから7年の月日が流れた。あの時一人も戻らないのではないかと思われたこの

【かどのわき町内会 平成30年度事業報告書】

1	第1回役員会 総会について	26名	4月16日
2	平成30年度総会	53名	4月23日
3	日和山避難階段清掃活動	95名	5月12日
4	第2回役員会	20名	6月4日
5	子供育成部バーベキュー	40名	7月15日
6	第3回役員会	22名	8月6日
7	夏祭り・区画整理竣工式	220名	8月18日
8	カラオケお茶会	44名	9月17日
9	芋煮会	95名	10月7日
10	第4回役員会	22名	10月15日
11	遺構と地域のこれからの語る会	30名	10月22日
12	町内会日帰りバス旅行	62名	10月28日
13	石巻市総合防災訓練	70名	11月4日
14	日和山避難階段清掃・餅つき	100名	12月29日
15	町内会新年会	90名	1月27日

その他、毎水曜日はいきいき体操教室、毎金曜日は健康マージャンです。

【その他・ボランティア関係行事】

平成30年

4月	オアシスお茶会(30名)、東北大ボランティアお茶会(20名)、チェロ演奏会(28名)
5月	東北大ボランティアバスボム(20名)、立木義浩撮影会(23名)
6月	あの頃のコンサート(70名)、オアシスお茶会(30名)、やっべすお茶会(36名)
7月	東北大ボランティアミサンガ作り(36名)、マッサージ教室(26名)、詐欺・悪徳商法講習会(60名)、アロマハンドケア(20名)
8月	環境ネット植物植え(6名)、オアシスお茶会(15名)
9月	やっべす清掃活動お茶会(20名)、自治連SDY懇親会(60名)、心の農園プランター作り(12名)
10月	水族館劇場観劇(50名)、ユニタール交流会(5名)、環境ネット植物観察会(15名)、心の農園プランター作り(15名)
11月	栃木県鳥山まごころ子ども親善大使交流会(65名)、神奈川フィルあつたかコンサート(35名)、石巻2.0 映画とトーク(30名)
12月	大分県日田市チーム日田中学生クリスマスイベント(80名)

地区に4棟の復興住宅が建ち、現在180世帯が戻ってきている。2016年かどのわき町内会が発足し、まち開きが盛大に行われた。新住民も、被災し転出した住民も共に祝った。新門脇地区の初代会長に選ばれたのは前述の本間英一氏であった。融和がスムーズにできたのは旧住民の努力があった。「復興住宅」に入居してから新しく町内会を作りなさいと言ったって無理でしょ。だから最初から一緒に町内会にしようって話してたの」と住民の一人は語る。旧住民32名は動ける者全員が町内会の役員となり一丸となって新住民との融和を期して新住民を待っていたのだ。

まち開きを終えた新しい門脇地区には、地域住民同士の強い結びつきと明るい笑い声があった。復興住宅建設計画が持ち上がったからこうなるまでは平坦ではなかった。旧住民には新住民とうまく町内会を築けるかという不安があったのだが、これらの不安を打ち消したのは、3人の女性たちの活躍であった。

本間家と共に地域を支えたのは、当時50代後半であった「若妻会」の女性たち。薬剤師だった佳子さん。栄養士の資格を持つ親子さん。本間家の信子さん。皆80代の親世代を介護し、なんとか避難させなければならぬ立場であった。この若妻会が毎週

いきいき体操を通した地域づくり

行っていた「いきいき体操」の継続が、新しい門脇地区を形づくったことは間違いない。

最初に被災者の体操のきっかけを作ったのは愛知県から来た医療生協であった。どんな体操したら避難生活による運動不足を防げるかを丁寧に教えてくれた。介護高齢者を抱える若妻にとつて何よりも必要なことであった。家に残った高齢の介護老人を見捨てられず自分も家に残り、波に呑まれた住民も数多くいる地域である。

「年寄り日和山までの階段上れないでしょ、車で避難できるように道路造ってって頼んだのに、ダメだったのよ」と若妻会メンバーは目の前にある参道の、急な石段を見上げる。「だからね、毎週体操して自分の足で避難してもらわなきゃいけない」と明るく語る。心の奥は見えないが、何を恨むわけでもなく常に前を向いて進もうとする。「だから毎週水曜日にいきいき体操をすることにしたの」

若妻会の3人は行動を起こした。中央包括支援センターに講師派遣依頼をした。10週間だけということで「まねきの家」で毎

週15〜16人のメンバーが集まって体操を始めた。約束した10回はあつという間に過ぎってしまった。約束だったがここで中断されたら元に戻ってしまう。「なんとかできないかしら」と中央包括支援センターに相談をして「月に2回は継続します。あとの2回は地域で」という約束を取り付けた。残りの2回は若妻会が指導することになった。周りが大変な時に月に2回でも来てもらえらることに感謝しつつ、「自分たちで何とかせねば」という気持ちが生まれたのは、この経験があつたからだと言妻会の3人は振り返る。いきいき体操を続けるうちに、参加者の顔に笑顔が戻ったのが何より嬉しかった。車椅子でやってきたSさんが立ち上げられるようになったことで続ける意義を感じ取ることができた。他の人のために夢中で活動することで苦しい気持ちから抜け出すことができた。

立ち退きと 復興住宅集会所の設置

2015年復興計画に基づきJENよりいただいたプレハブ「まねきの家」が使えなくなることになった。ここで3年間続けてきた「いきいき体操」も中断せざるを得なくなった。「どうする？」とメンバーは

額を寄せ合つて考えた。集う場所、健康を維持する場所の必要性を痛感したので「いきいき体操」を中断するのは痛手であった。高齢者の運動能力は1週間休んだだけで大きく後退する。何としても続けたい。若妻会は思いつく方々に協力依頼をした。すると、当時造成を請け負っていた竹中工務店から「それなら現場のプレハブの一室が日中だけなら空いているから使ってください」との温かい言葉を頂いた。これで当分の場所が確保できた。

その頃、市役所からは今後できる復興住宅の計画について旧住民への提案があつた。それによると、復興住宅には集会所ができること示されていた。当初の計画は数十人が集まれる程度のものであつた。これでは今まで続けてきたいきいき体操をするには十分ではないと感じられた。市役所と旧住民・若妻たちは粘り強く話し合いを続けた。話し合いを通して、石巻市がこれ一杯ですという程の集会所ができあがつた。

現在門脇復興住宅集会所には100名を超える地域住民が集う。毎週水曜日には50名を超える高齢者が歩いて集う。90代も5名参加し共に笑いあう。年に何回かは伝統的な季節の行事を行い互いの健康を寿ぐ。雛祭り会では、お内裏様とお雛様の仮装を

してコンクールをしあつて笑顔になる。節分の会ではボランテアも加わつて扮装した鬼に皆で豆をぶつけて邪を払う。高齢者のひきこもりを防ぐために週に1回健康麻雀も始まった。

集会所での活動の後、住民たちは、集会所の向かいにある「まねきショップ」に集い語らう。「まねきショップ」は本間家の当主が門脇住民のためにと私財を投じて建てた店舗である。

国産の木材をふんだんに使つたその建物は建っているだけで心を癒す。夏には海風が入り、冬には薪ストーブの温もりが心地よい。

「まねきショップ」には、地域住民が集いおしゃべりを楽しむ。健康に関する相談も多い。時には救急車を呼んで欲しいと飛び込んでくる住民もいる。「まねきショップ」はふれ合いサロンであり見守り拠点として機能している。本間家にある被災した蔵には千石船に関する貴重な資料が数多くあり、国内外からの大学生も学びに来る震災伝承拠点でもある。

地域住民は「まねきショップ」を頼りに集う。

あの時、ふたたびの命を頂いた住民たちには想像できなかった「まだ見ぬまち」が、今ここに形づくられようとしている。